広津さんのこと

古山　登

横浜の近代文学館では「文学の挿絵と装幀展」の後企画として「広津和郎展」を計画・準備中ということだ。

広津和郎（明24～昭43）と云っても没後三十年近い今では人柄も業績も知る人は少なかろうが、私にとっては最も懐かしい作家の一人である。

広津さんは、徳田秋声・一穂の父子、吉行エイスケと淳之介・理恵兄妹、大宰治と津島佑子・太田治子の異母姉妹、村松梢風・友視等例がないではないが、家名や七光りが効かない一代限りの小説家の世界に在って父柳浪（文久1～昭3）娘桃子（大7～昭63）と三代に亘って小説家という珍らしい家系で、戦前は創作の傍ら当時の非左翼作家としては珍らしい思想・社会に関心を示し、「神経病時代」（『中央公論』大6・10）「風雨強かるべし」（『報知新聞』昭8・8～同9・3）等の問題作を発表する一方、「怒れるトルストイ」（『トルストイ研究』大6・2～3）「さまよへる琉球人」（『中央公論』大15・3）などの論評を通じて、一貫して知識人として多くの悩める知識人や文化人の支持を受けた。

私が広津和郎の名に初めて接したのは中学二年の時、一応少年小説を卒業して家に在った改造社版『現代日本文学全集』や新潮社版『世界文学全集』などを無作為に読み漁るようになった頃だったが、正直言って同世代の宇野浩二（明24～昭36）、葛西善蔵（明20～大3）、佐藤春夫（明25～昭39）などに比べて読後の印象は弱かった。

しかし翌三年時夏休み前に『子を貸し屋』（宇野浩二、大13、文興院）『人生劇場・青春篇』（尾崎士郎、昭10、竹村書房）『田園の憂鬱』（佐藤春夫、大8、新潮社）『サーニン』（アルツィバーシェフ、改造文庫）などと一緒に古本屋で一括購入した『風雨強かるべし』（昭和9、改造社）に接し、私の広津和郎観は一変した。凄い作家だと思った。

この作品の主人公佐貫駿一は大正末期から昭和初頭にかけて全盛を極めた左翼が退潮し、代って軍国主義の靴音が日増しに高まり始めた昭和初期の大学生で、社会全般の右傾化軍国化には反対だがイ

デオロギー主導の左翼にも随いて行けない、かと云って時代の浅薄な享楽主義にも同調できない、良心的だが非行動的な当時の典型的な〝悩める知識人〟でもあった。また、彼は彼の亡父の遺産を管理してくれている実業家飯島千太の令嬢ヒサヨと親しくしていたが、一方大学の社会科学研究会で知り合った女子大生梅島ハル子に心惹かれるようになり、その間に在って二重に苦しむ。

ハル子も一時は駿一の愛に応えようとするが結局階級的使命感を捨てきれず駿一の許を去り、駿一もやがてヒサヨと結婚する。しかし駿一は、岳父の事業を継ぐでもなく、また公務員や大企業に職を求めるでもなく、ヒサヨと一緒に小さな洋裁店を開き、市井の一市民として平穏に生きることを決意する。

この作品が書かれたのは日本が中国侵略を開始した満洲事変・上海事変（昭6）直後の昭和八～九年、私が読んだのが日中戦争開始から四年目の昭和十五年で、軍国化の度合いには大きな差があり、駿一は左右両翼の思想の谷間で苦しむが、私の周辺には最早サヨクのサの字もなく戦争政策批判、体制批判など一切許されなくなっていた。だからこそ、なのかも知れないが国や体制・社会に正対し、その矛盾から目を外らそうとしない〝左翼人〟でない男、佐貫駿一に私は「人間として如何に生くべきか」の理想像を見た思いがしたのだった。そして、窃かに自分自身の行く末を佐貫駿一と重ね合わせてみたものだった。

広津さんに初めてお会いしたのは、間に敗戦を挟んで「風雨強かるべし」に感動してから約十年後の昭和二十六年一月であった。場所は新宿の酒場「ととや」。この店は新宿の老舗中村屋の裏手に在ったビジネス・ホテル「ととや」が併設していた酒房で、織田作之助（大2～昭22）の未亡人昭子さんが雇われマダム、青野季吉（明23～昭36）、伊藤整（明38～昭44）、亀井勝一郎（明40～昭41）、中島健蔵（明36～昭54）、中野好夫（明36～昭60）といった中央線、小田急、京王線沿線に住む錚々たる作家評論家が屯する別名「夜の文芸家協会」であったから、編集者になって一年にも満たない私などが滅多に顔を出せる所ではなかった。

しかし、この日は仕事だからと約束の時間を待って勇躍して出掛け店に入るなり「広津先生は？」と聞くと「広津先生ならホテルの方じゃないかしら。聞いてみてあげるわ」という昭子さんの返事であった。失敗った、と思った。「ととや」というので私は酒場の方だとばかり思い込んでいたのだが、酒を飲まない広津さんの場合「ととや」はホテルだったのだ。熱海住いの広津さんはこのホテルを仕事場として定宿にしていたのだった。しかし私と昭子さんの会話が聞こえたらしく奥から声がした。「広津が来てるのか。それじゃ、こっちへ降りて来ないか、って言ってくれ、青野と保高（やす）（徳蔵・明22～昭46）がいるからって言ってくれ」青野さんの声であった。

すると昭子さんがすっと起ち上り、「電話でお呼び立てしたんじゃ失礼だから、私お部屋の方へ伺ってみますわ」と言って店を出て行き、やがて広津さんを伴って戻って来た。しかし、青野、広津、保高と云えばほぼ同時期に早稲田で学んだ何十年来の古い付き合いで私の入り込める余地はなく、『「改造」記者・古山登』という名刺をお渡ししただけで三人の歓談を聞きながら、小さくなって一番安いトリス・ウィスキーをチビチビ嘗めつづけるばかりであった。

初対面はこんな風だったが、以来広津さんには目を懸けていただ

き、この年の三月号に「銀色の月」を頂載したのを手始めに翌年から替った新しい仕事場の「双葉館」には広津さんが出京する度に毎月お訪ねし、パチンコ屋や近所のコーヒー店や後楽園球場にもよくお伴をした。熱海のお宅へ伺った時には、志賀（直哉・明16～昭46）さんや谷崎（潤一郎・明19～昭40）さんなど熱海の名士連御贔屓のレストラン「スコット」でスコッチやビーフステーキを御馳走になった。勿論、本業の方でも毎年一作、時には二作短篇小説を寄稿して頂いた。

しかし何と云っても私の胸に強く刻み込まれているのは『改造』争議に於ける広津さんである。

改造社は大正八年四月山本実彦（明18～昭27）により創設、看板雑誌『改造』はいわゆる「大正デモクラシー」の波にも乗り、昭和十九年七月政府により解散・廃刊させられるまで『中央公論』と共に知識人層のオピニオン・リーダーの役割を果たして来たが、戦後は社主山本実彦の公職追放という事情もあり、社内の労使関係は常に不安定で戦後十年間に大きなものだけでも争議が三回もあった。

第一回は昭和二十三年十二月、この時はGHQ筋の介入があり中央労働委員会も手を引いて泥沼の様相を呈し、寄稿家を代表して川端康成（明32～昭47）、中島健蔵、丹羽文雄（明37～）氏らが調停に入ったが経営側が拒否、結局『改造』編集長と主な編集スタッフ三名が自発的に退職して収拾。この後、有力執筆者百余名の執筆拒否が約半歳つづく。

次が昭和二十六年五月。原稿料、印税の末払いを含む負債約四千万円で倒産による従業員半数解雇という内容だったが、負債を上回る使途不明金が発覚し、その大部分が追放解除を俟って本格的に政界に進出しようと秘そかに活動を開始していた山本実彦の政治資金に流用されていたことが知られるところとなり、寄稿家ばかりか紙・印刷・広告など業界大手業者の不信を買い、倒産と同時に設立された新社との信用取引は一切拒否されることになった。

そして三回目が昭和三十年一月、この時は山本実彦は物故していて未亡人とその実弟が社長、副社長のポストを占めていたが、この二人を除く全役員の解任と女婿の代表取締役専務就任、そして『改造』編集部員全員解雇と兎角の噂のあった人物で構成された新編集スタッフの発表から始まった。

当時の私は労組の委員長で闘争宣言発布と同時に闘争委員会になり直ちに闘争態勢の組織に取りかかった。

出版社の争議の場合、寄稿家の支持を得られるかどうかが勝敗の分岐点になる。そして支持を得られるかどうかは中心に据える人物がポイントになる、中心になる人物には広津さんが最良ではないかというのが私たちの結論であった。広津さんなら志賀さん、谷崎さんなどの先輩、宇野さん、佐藤さん、青野さんなどの同世代の人たちから信頼されているし、川端さん、井伏（鱒二・明31～平5）さん、丹羽さん、中島さん、中野さんなど後輩の文壇有力者からの信望も篤い。また、前年から『中央公論』に連載している「松川裁判」などで一般社会への知名度も高い、というのが主な理由であった。

私は早速止宿先の本郷の双葉館に広津さんを訪ねて争議のいきさつを事細かに説明し組合支持を要請した。

広津さんは黙って私の話を聞いていたが、私が話し終ると、

「分った。横関（愛造・明20～昭44、昭和二十九年十二月改造社代表取締役専務を解任される）や秋田（忠義・『改造』初代編集長、

小原光学社長、生没年不明）君とも相談して山本の細君にも会ってみよう」との答えであった。私には意外であった。私としては二つ返事で快諾してもらえるものと確信していたからである。私は思わず言ってしまった。「わざわざお会いになることはないですよ。あんな連中にお会いになっても無駄ですよ。まともに話の通じる相手じゃないですよ」

すると広津さんは笑い出して、

「きみ、そう言ってしまっては、ミもフタもないよ。きみたちは当事者だからそんなふうに言うが、ぼくは山本家と云えば実彦しか知らないんでね、山本家できみたちのことを聞いてみてそれからでないと動けないね……ぼくはね、最初はどんなに評判の悪い人物でも好意を持って信用することにしているんだ、山本の細君だってぼくは知らないから今は好意的に信頼したいんだ。会って話をしてみれば悪玉かどうか直ぐ分るからね。自分の目で確かめた上でのことにさせてほしいんだ。それが作家というものなんだよ」と論すような調子で答えられた。

はっとした。失言だったと後悔した。一切の予断や偏見を排し、自分自身の目で見、自分自身の手で探って自分自身の頭で判断する、そして一旦判断するとその判断に対して誠実に行動する、それが広津さんの生き方なんだということは百も承知していた筈なのに、そしてそんな広津さんだからこそ多くの人々から年代階層を超えて信頼され、「松川裁判」などの社会的発言にも説得力があるのだと常常言っていた私だったのに「会っても無駄」なんてなんと軽はずみで独りよがりの発言をしてしまったものかという思いがぐるぐる頭の中を駆け巡った。

しかし結果的には山本家との会談を終えた広津さんは組合側を支持して下さる態度を明確にされ、青野さん、論壇を代表して積極的に参加して頂いた久野収（明43～）学習院大学教授と共に新編集スタッフが隠密裡に進めている執筆依頼に対し返事を留保するよう呼び掛けた「第二『改造』不執筆同盟」の呼び掛け人になって頂き、更にこの同盟を発展的に解消して作られた「『改造』を守る会」では発起人としてお名前を連ねて頂いた。

この「守る会」には山本実彦が生前昵懇にしていた方々を含め文壇論壇のビッグ・ネームがずらりと連なり、会員数も千二百名を超える有様で組合側を圧倒的な優位に導いてくれた。

また、経済面でも広津さんにはお世話になった。

争議も二か月日になると当然のことながら給料が払われないので闘争資金も枯渇し組合員の生活も苦しくなる。そこで、それまでも関連労組などからのカンパを受けていたのだが「守る会」の方々にもお願いすることになった。

広津さんは逸速くお願いに応じて下さり、カンパ張の第一行目に「広津和郎　一、金壱万円也」と書かれたが更に「但し第一回分」と書き加えられ「さ、これを持って丹羽君のところへ行きたまえ、電話をしておくから」と仰有った。因みに当時の私の月給は九千円、第一回分ということは第二回があるということである。

丹羽さんも「一、金壱万円也　但し第一回分」。そして、三行目からも「一、金壱万円也　但し第一回分」がしばらくつづき、組合員の生活も組合の財政も大いに助けられたものだった。

第二回分は三月に入ってから金額は夫々五千円だったが、どんなに有難かったか、私の懐かしい青春の一頁である。